

慶應義塾に関連した出版物や教職員の新刊著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

## モノと自己との関わりを

### ネット上で展示する取り組み

#### 『デジタル世界図絵』

ヴァーチャル・ミュージアムの取組み

眞壁宏幹（文学部教授）・眞壁ゼミ著

慶應義塾大学出版会／770円（2022年11月）



近年、芸術表現を応用する教育メソッドとして注目される「アートベース教育」。文学部・眞壁ゼミでは、その試みの一つとして、ゼミ生たちがこれまで関わってきた人やモノを通してそれぞれが自己形成について考察を深め、それをヴァーチャル・ミュージアムの展示作品として表現する「ヴァーチャル・ミュージアム デジタル世界図絵」という取り組みを行っている。本書は若い世代の将来の生き方にベクトルを与えることを目指す、この「教育プロジェクト」のコンセプトから説き起こし、最終章ではヴァーチャル・ミュージアムによって開かれる教育的意義とその可能性を提示する。

## 教職員執筆の新刊

●安藤寿康（文学部教授）著

『生まれが9割の世界をどう生きるか』

― 遺伝と環境による不平等な現実を生き抜く処方箋』

SBクリエイティブ／990円（2022年9月）

●白井さゆり（総合政策学部教授）著

『SDGsファイナンス』

日経BPP 日本経済新聞出版／1045円（2022年9月）

●宮川祥子（看護医療学部准教授）ほか編

『ナイチンゲールの越境9 人工知能はナイチンゲールの夢を見るか？』

日本看護協会出版会／2970円（2022年9月）

●烏谷昌幸（法学部教授）著

『シンボル化の政治学―政治コミュニケーション研究の構成主義的展開』

新曜社／3520円（2022年10月）

●友岡賛（商学部教授）著

『会計学を求めて―基礎概念と存在理由』

慶應義塾大学出版会／2750円（2022年11月）

●朝比奈緑（名誉教授）著

『詩が語るアメリカ―多様な声への誘い』小島遊書房／2090円（2022年11月）

## 慶應義塾の一冊

### 『福沢諭吉の初期思想』

― 近代的概念の受容と変容』

姜允坑（法学部非常勤講師・

福澤研究センター調査員）著

慶應義塾大学出版会／4950円

（2022年8月）



翻訳者としての福澤諭吉は、何をどのように訳し、何を訳さなかったのか。本書は幕末から明治初年の「初期」に焦点をあて、福澤が西洋からいかなる近代的概念を受容し、変容させて日本社会に伝えようとしたのか、筆者の論文を加筆修正し、書き下ろしを加えて再構成したものである。「自由」「独立」などだけでなく、「入種」「労働」「義務」「民権」「分限」といった概念について、福澤が参照した西洋の書籍とその翻訳・翻案の文章とを比較検討し、そこに表れる翻訳思想、西洋の近代的概念の受容・変容過程を読み解いた。